

五十肩に新治療法

からだ

肩関節の周囲に炎症が起きる「五十肩」で、痛みを抑える局所麻酔薬や消炎鎮痛薬を注射後、縮んで動きが悪くなった袋状の組織「関節包」を医師の手で広げる治療法に、神戸市の開業医が取り組んでいる。これまで160人以上に行い、「痛みや肩の動きが改善し、手術より負担も少ない」と好評という。治療後の患者に、別の施設がリハビリを指導するという連携も始まっている。

(金井恒幸)

神戸の開業医

麻酔薬、手技を併せ



リハビリ施設と連携

鎮痛薬を注射して痛みを抑えた後、手で全方向に肩を動かして関節包を広げる治療法を実施。超音波(エコー)検査装置で体内を見ながら注射してその正確性を高め、肩を動かす方法もさらに改善を重ねてきた。秋田でも既に数百例の実績がある。

治療後、早い人なら当日や翌日、遅くとも1週間程度で痛みや肩の動きが改善。その後は連携する神戸や三田市の医療機関でリハビリを続け、多くは1カ月程度でほぼ回復した。リハビリを担う整形外科医から「効果は手術と同レベル」との評価も得ているという。

この治療法はまだ医師の間でも十分には知られておらず、朴院長は昨年開かれ

注射後に患者の肩を動かす朴基彦院長＝神戸市中央区御幸通6

五十肩は一般的には半年～1年ほどで徐々に自然回復するとされるが、痛みで不眠になったり、日常生活に支障が出たりする場合がある。筋力の回復や筋肉の柔軟性を高めるリハビリでは改善しない難治性のもも。関節の周りの関節包を一部切り広げる手術法はあるが、入院が必要で患者の負担が比較的大きい。

「はくへインスクリニック」

(神戸市中央区)の朴基彦院長(42)は、手術前の全身麻酔中、医師の手で関節包を広げる「授動術」が以前からあることに着目。外来でより効果のある方法がないかと、知り合いの秋田県の整形外科医と協力しながら模索してきた。

その上で朴院長は約2年前から、首から肩にかけての神経に局所麻酔薬を、肩関節内に局所麻酔薬と消炎

縮んだ「関節包」広げる